

編^あ集^と後^が記^き

1

この『アナキスト詩集』に、数多い人々のなから、なぜこの一〇人をえらんだかという問題がある。二つのポイントにおいて、それはある。

一つは中浜哲、後藤謙太郎または村木源次郎をえらばなかった理由は何かということである。中浜哲の有名な詩「杉よ！ 眼の男よ！」は定評のある作品で、『日本現代詩大系』第八巻（河出書房 一九五一年）にも収録され、また彼には一九三二年にガリ版の『中浜哲遺稿集』という詩集もある。後藤の『労働放浪監獄より』もその早い時期における労働者の階級的反抗の発想として注目されるものであり、また村木には、わずか三、四篇の詩や歌があるだけだが、彼の童謡風の作品にはおどろくべき完成がある。

ユキノヤマノオクノオクノ

オクヤマデ

ヒサイタオデチャン

ネテイマス。

オテテヲムネニ

チャントオヤ、

雪ヲヒトネニ

ワライガオ。
カヘラナイカト
キイタラバ、
静カデイイヨト
イヒマシタ。

(ヒサイタチャン)

大正十一年一月二日、同志久板卯之助が伊豆天城山の猫越峠に凍死したとき、岩佐太郎、望月桂とともに村木源次郎は彼の死体を仕末するために行った。そのときに出来た詩であろう。童謡風なうたい方に限りない悲哀がこめられ、「監獄通い」「マコヨ」などと共にアナキストの詩として鮮烈な印象を伴って記憶されている。

しかもこれらの人々の詩は、時流と無縁であって無縁でなく、中浜哲における大正末期の『赤と黒』その他の前衛詩の影響、後藤に見るプロレタリア詩の先駆、村木の童謡的発想など、どれも日本詩史の大正の歩みの中のものである。「アナキストの詩」として挙げない理由はないのだが、この編集の狙いには少し別のものがある。それは『赤と黒』にはじまって、以後大正から昭和一〇年までにおける、アナキズム文化活動の一環としての詩活動に積極だった者のなかからえらぶことを目安としたからである。そして戦後の詩人を加えてえらばれた一〇人の経歴と活動とは、各人の項に紹介した。それは少し簡略すぎるかもしれないが、それぞれの時期にも、地域的、グループ的にも活動し、また詩作の力ということも条件として、『赤と黒』(一九三三年)から『詩行動』(一九三五年)までの間に於ける活動的だった詩人をえらび得たと思う。

戦前、昭和一桁時代に多数の活動者を持つアナキストの詩の運動のなかには、もっとも適任者がいるはずだ、という質問が出て来ても無理からぬことである。私自身そう思

っているが、しかしアナキズム運動の広い各現場における活動にもかかわって来た、だから詩壇的な詩人とはいささか離れ、そして割と力量ある詩人を求めようとすると意外なほど少なかった。アナキズム詩などというものはないのである。マラテスタやクロボトキンを謳い、マフノやバクーニンに呼びかけ、サッコ・バンゼッチ事件等を怒る詩を聞いたからといって、それでアナキスト詩人ということにもならない。それは彼が、国家やその他の権力とどういうかかわり方で来たか、生きつづけているか、という問題である。

大正・昭和における活動によって、つとに世間的にアナキストと目されつつ来た幾人かの戦前の詩人たちも、秘密にいうなら、第二次大戦を挟んで、またその後の行動によつて、判断のむずかしい問題を抱えている。

その事実を知って私は敢えて彼らをここに選んでいる。それは戦前の時期に、アナキストとしての苦しみを耐えて活動した実績、昭和のアナキズム活動と共に歩いた事実を目をとめざるを得なかったからである。だから彼らが、戦後日本共産党に入ったり、それを拒否しなかったり、戦後のアナキズム活動に協力しなかったり、あるいはもう一度日共を抜け出て見たり、それらの右往左往に一応を目をとめながら、つまり詩誌でいえば『赤と黒』から『詩行動』までという十二、三年間の活動に絞って、その間における活動とその文学評価をテーマとしてこの一冊の『アナキスト詩集』を編んだのである。

しかし、ではこの本は過去を編集したものか、という問あらば私は否とこたえねばならない。ここには戦後の詩人も登場し、彼らは戦後の、それぞれの地域におけるアナキズム的な社会活動——反戦、平和、非暴力なる直接行動、反安保、反政治、反政党等々の活動に自分を投じつつ、そこから彼らの詩を生んでいる。失敗し、変貌し、なお『アナキスト詩集』に名を止める戦前先輩の跡を踏むまいと現実の努力をつづけている。

すつきりするというところからいえば、『赤と黒』の頃から、無政府共産党や農村青年社

事件、そして解放連盟が潰れて後アナキズム運動が一時窒息するまでの期間に人を絞る方がはつきりする。しかし私は戦争を挟んで、戦前の文学活動の芽がふたたび萌え出た以後の、形も質も改まった活動に、重量を感じつつある。そこで戦前六人、戦後三人、戦前戦後にわたる者一人をえらんでこのような編集となったのである。

2

アナキストの詩はマルクス主義的詩人（私はこの双方をプロレタリア詩と見る）の詩とどこが違うのか。それはアナキズムとマルキシズムの革命思想としての本質的差異とその対立に由来するが、それを作品に見る場合、芸術革命の問題に要約される。マルクス主義詩人の第一人者中野重治が『赤と黒』等のアバンギャルドの活動にたいして「私はまた謂わば叫喚詩派あるいは騒音詩派とも称すべきものを屢々見せられている。それは常に街頭であり自動車であり首であり血みどろであり売淫であり××であり××でありやくそであり、ドタン、バタン、クシャツ、×××等である。それはどうにも我慢ならぬ気持であり黒い虚無の風穴である。／＼そしてこれらの何れもが、それ自体には全然無産階級的でない。／＼けれども私達はここに言う騒音詩派のみは必ずしも捨てないであらう。何となれば『新しい形式への探究は実にあらゆる××の本質的なダイナミズムに対する偏愛からである』からである。そこには常に車輪を前方へ押し廻そうとする熱意が些少なりとも見出せるからである。」（詩に関する断片）といったことは、幅のひろい、プロレタリア詩の歴史的な問題を語っていて興味ふかいが、ここでは芸術革命の問題として、考えることがかりとする。

回想詩派、幻想詩派などと並べて叫喚と騒音の詩派（ダダその他の前衛派を目ざす）を指して「我慢のならぬ虚無の風穴」といい、「全然無産階級的でない」と否定しながら、そ

の騒音詩派のみは「必ずしも捨てない」といったとき、マルクス主義詩人中野が、反マルキシズムの『赤と黒』などの形式革命運動の奥にひそむ時代的な芸術変革の必然性とそのポリウムに心ひかれたことを、この言葉は示している。芸術革命としての『赤と黒』出現の意味は、新体詩から民衆詩派までの形式（とイデオロギー）を否定したところにある。彼らの作品はまだ殆んど態をなさなかったが、表現そのものに新時代を要求したことは、在り来たる形式で「革命」をうたい上げようとした、イデオロギー偏重の社会主義的詩人とは次元のちがった革新を孕んでいた。階級意識を宣伝煽動するために詩を必要と考えることと、詩人の主体において変革の情熱を謳わんとすることとの必然なる詩的落差はそこから生ずる。後者はそれは芸術革命によって革命芸術を進めるといふ、詩人の主体を生かす道でなければならぬ。しかしそのように出発をしながら、『赤と黒』同人をも含めてアナキストたちが芸術革命の歩みに外れざる詩の道を歩いた、ということにはならない。多分それは、時の勢いで強力化するマルキシズム芸術運動の、政治中心の組織力目を奪われたためであらう。青野季吉のレーニンの革命論を文学運動に転用した「自然生長と目的意識」論によって、アナ・ボル共同戦線が排された以後のアナキスト側の混乱は、文学と政治における主体性の動揺である。芸術革命に突出した変革の詩のプログラムは、集団の力の如何にかかわらず、唯一人によってでも進めらるべきであったものを、イデオロギーの対立（これは必然）に目を奪われて、芸術をアナキズムのイデオロギーに従わせようとした、スケールの短い活動に落ちる危険があった。その道はアナキストの詩であるよりも、アナキズムの宣伝、そのための活動、のための詩の運動ということに下落せんとするものであった。芸術が革命の奴隷となつてよいという主張はどこにもなかったのに、常識的な組織を必要と考へ、革命の論理にのみ芸術の意味を見出そうとして、そのための転向者も輩出した。曲りなりにも昭和のはじめにアナキスト詩人が存在し得たのは、それ

から後のことに属する。革命も芸術も文学も、人間のために必要である、ということを通然と納得し得たのは文学におけるアナ・ボルの対立がはっきりしてからのことであった。

「書かれざるものは詩にあらず。われわれはこの言葉の中に、在来の種々の矛盾を一掃し、視野をわれわれの生活と芸術の前途に展開せしめる可能性を含む意図を見ることが出来る。生活そのものの中に詩を見、詩と生活の一致を唱道する、誠実なる詩人の体内の血よりも、むしろこの暴言を為す者の身内に逆流する血の方が新鮮である。」（今日の詩人）一九三〇年『弾道』創刊号）

「詩と行動（文学と現実）」をゴッチャに取扱うことは詩の本質をアイマイにする。詩の本質を究めるためには、詩と現実を截然と区別する必要がある。しかし新しい詩論家のように、文学と現実を平行線の上においてその各々を見るのではなく、現実を文学の延長線上に考える。それは二本の平行線ではなく、あくまで一本の現実の直線なのだ。その一本の上で、僕という詩（プロレタリア詩）と行動は、二つに分つことが出来る。即ち文学行動は生活行動のある水準以下に於てのみ生活行動と一致し得る。生活行動が上騰するとき文学行動はそれに追いつけぬ。」（『芸術に関する断片』一九三一年『弾道』第七号）これはアナキストのもっとも有力な詩誌『弾道』における主宰者小野十三郎の意見の要旨である。組織あるいは指導部からの司令に服従するのみではないアナキストの文学活動に、文学の自由性あるいは芸術主義的独立性の意向がひそんでいることは、むしろ必然である。しばしばアナキスト詩人らが落ちた生活優位の心情と、またマルキシズムの政治優位の文学観に対するやや明瞭な立場が、はじめて確固と押し出された、と私は思う。

ここに至るまでには、『赤と黒』以来のアバンギャルドの活動があり、それをうらがえしにした反政治—生活優先のセンチメンタルなヒューマニズムが、アナキズムと混同されすぎたこともあった。

革命のための文学の主張も人間主義のうた声も、耳に入り易い。詩と生活の二元論は時に甚だしく現実的に見えもしたのである。

今日ふりかえるアナキスト詩人の足跡も亦これらの不安定の中に動揺しつつ、時に自己嫌悪をもって、自己とたたかい、流行するヒューマニズムや所謂左翼と対峙しつつ支えられた。各々に片よりがありながら、連帯と対立を敢えてしながら、味方に敵を、敵に敵を見ようとしてきた足跡としても、幾人かの詩人の作品を読むことは出来るだろう。

3

この詩集には、一〇人と限定したために、収録を見合せざるを得なかった詩人が幾人かいる。また活動の足跡をのこしながら、年月の彼方に失われた姿もある。

また今日までに『アナキスト詩集』と銘打ったものが一つ、アナキ系詩集とその時代に見られたものももう一つ、都合二冊のアンソロジーがある。

この前者は一九二九年に鈴木柳介が編集、その年あたりまでの活動者を網羅したのであるが、アナキズムとかかわりの不明な詩人たちが入って、不明確なる上に、作品の選択にも積極性がなく、したがって力感がまるでない。もう一つは『学校詩集』同じく一九二九年の刊行であった。こちらは「アナキスト詩集」と名乗ったのではなく、アナキズム系と見られていた小詩誌『学校』の寄稿者を中心に、ひろくヒューマニストたち（反マルクス主義詩人）の作品を集め、アナキ系詩人のアンソロジーと見なされたが、当時活動的なアナキスト詩人も多く、三七人の詩をあつめている。

なおアンソロジーとしてはその他に『南海黒色詩集』（一九三二年、松山市）、『北緯五十度詩集』（一九三一年、北海道）など地方的な刊行もあった。

それらの詩集、詩雑誌等にふりかえって見て、ここに洩れはしたが、紹介しなければなら

らぬ数人がいるのである。

金井新作は今年になって第二詩集『題を忘れた絵』を出した。一九三四年に第一詩集『瀧』を出してからまる四〇年目である。びっくりするほどの息の長さ。一九二七年に『文芸解放』同人、それから後『バリケード』『矛盾』『黒色戦線』『弾道』などの主要なアナキズム系の雑誌には、かならず彼の強度にヒューマニズムな、そしてその意志的な作品が発表されてきた。戦争の下を殆んど無発声にすぎたことも記憶されてよからう。アナキズム系詩人の中にも比肩する者の少ない向日性な明るさが、金井の詩の特長である。

薄 化 粧

妻は、それにかかったら、七年しかもたないと云はれる、
怖ろしい病気で、四年越し寝てゐる。何時、どうなるか解
らない不安が、絶えず私たちの上に被ひかぶさつてゐる。

お前は床に坐つて、おつと俺を見つめてゐる。俺も黙つて、お前を見てゐる。心の中には、複雑な想ひが渦巻いてゐるだらうに、今うつすら化粧して、如何にも澄切った感じの、お前の姿は俺を泣かせる。

妻よ！ 死なないで呉れ！

反戦、平和の詩人金井のもう一つの姿を見せた、めつたに誰も、このようには書けない詩であろう。アメリカとの戦争中書いた「日米戦争のさ中」にあって ウォルト・ホイットマンを憶ふ」という豪毅な発想など、金井の面目をうかがうに足るこの上ない明るさと、力ある作品であつた。アナキズム系の詩人にいた、ダダでやけくそで、ニヒルな発言など

は彼にはなかつた。

碧 静江は竹内てるよ、野村考子などとともにアナキズム文芸誌の活動家であつたが、殊に竹内の作品には涙腺を刺激する抒情があつて知られたが、握力において碧静江のはげしい意識性に及ばなかつた。私は仲間の女性詩人としては、ついに一冊の詩集ももたなかつたけれど、この人を推したい。金井新作夫人、「薄化粧」にうたわれた人である。

坂本七郎は、センチメンタルでないともしえないが、金井とはちがつた形で、なかなかに意志的であつた。ヒューマニズムの色の濃い、反都会的な情熱で自分を支えているかに見えた。自分でガリ版詩誌『第二』を七号まで出し、『弾道』や『北緯五十度』萩原恭次郎の『クロボトキンを中心にした芸術の研究』などにすぐれたエッセイも書いてゐる。

「人間の多様性を無視して、単一な、統一された形式を強要するマルキシズム芸術論は、狹隘と圧迫と、鋳型と虚偽とを、そして、人間本性の美わしき情緒、個の意志、人間の行為のすべてが基く感情を、瓦礫の如く踏敷いて横行する。彼等の功利主義は、あらゆる人間性の崇高なもの、貴重なもの、個性、孤高なものをも利用し尽し（一つの強権主義への犠牲として）世界をいっそうガサツな、機械に化そうとする。もはや千万の労働者ですらこの怪物の食餌にならうとしている。指導者は動く単細胞としてのみ一個の人間を認めるのだ。この△合理▽を装う偽瞞！ 彼等の労働芸術は、硬化した一つの塔だ。それは新しき八バベルの塔だ。」

——幾人の眞の労働者自身によつて労働詩が作られたか？ 彼等はいうだらう。『問題は作者にはなく、見解にある。詩人は労働者でなくともよい。ただ労働階級の集団的生活と同一化し、その欲求と理想に貫かれ、その歎び、その悲しみを共にして、決してプロレタリアの芸術的表白者となるのである』この識見！ この詩風！ 彼の詩風は、

ものを見よ」(「マルキシズムの詩人へ」『弾道』創刊号)

ここでは批判の当否以上に、坂本七郎のはげしい意欲を見てほしい。この意見は素朴に情熱的である。彼の「夕暮の詩」というのは第一、第二、第三とあり、仲間うちで評判だった。アナキスト詩人を回想するとき、必ず坂本を思い出すのは、いつも論争の中にはいつて意見を発し、物欲しげな駆引がなく、作品にも力を示したからである。詩集はつくらなかったが、『学校詩集』に八頁にも及ぶ「第一夕暮の詩」が収められている。

草野心平は『銅鑼』から『学校』へと主宰して、昭和はじめに輩出したアナキズム系の詩人の中では目立った存在であった。彼の蛙の詩をあつめた詩集『第百階級』はその頃のアナキストの一詩集として語られた時期もあったようだが、私はその意味においては認めない。『銅鑼』がアンチ・マルキシズムであったことは確かだが、そのアナキズムには、プチブル的と痛く評されることへのカムフラージュの如き趣きもあり、このグループには生真面なヒューマニスト神谷暢、手塚武、坂本遼などもいたが、そこから発展的に社会主義やアナキズムに進み出る人よりも、より詩壇的な目くばりの方が重点だったかに見える。草野の詩的思想は個人主義、自由主義以外でなく、そのかぎりにおいてバイタリティがあり、詩表現への情緒的リアリズムは、ヒューマニストとして、詩を語りかける道具とする手並は、すぐれていた。そのための詩の表現技術への傾倒に草見を示したことは、今も評価されねばならぬところである。一九三三年前後、解放文化連盟結成や第二次『弾道』のころは、可成に積極的に参加するかに見えたが、やがてその後間もなく、アナキズムもヒューマニズムも彼の手許からこぼれてしまった。戦時と戦後においてまったく無縁の存在となった。

『銅鑼』の仲間では手塚武と神谷暢には触れなければならない。手塚の発禁禁止になった詩集『一社会人の横断面』について、私はこう紹介したことがあった。(『発禁詩集』

一九七〇年刊)

この詩集は昭和三年に『銅鑼パンフレット第三』として出された。……大正十五年に手塚武が、『銅鑼』の第八号に「新しい盗人」というソビエト・ロシア批判を書いて「ボルシェヴィキ革命が成功したか、失敗に終わったか、その論議は時期尚早である。そこには新しい封建主義が樹立された。依然として厳然たる権力主体がある——われわれの求むる所は、かれらマルキシストの将来しようとする『それ』以外のものである。」

とかいて、可成いささしく詩人間のアナ・ボル論争を展開しかけたことがあり、次号で赤木健介が反論する場面もあったのである。『銅鑼』については私たちがアナキズム系なりしことを疑わないのであるが、そう色濃くもなく、またその一色に定まってもいなかったようである。そのことこそ『銅鑼』的ともいうべく、その中で手塚は態度を鮮明にしていたらしい。

手塚と並んで『銅鑼』同人として、ヒューマンなアナキストであった神谷暢は、そこで知った病弱の女性詩人竹内てるよを助け、やがて協力して共同生活を敢てして溪文社を起し、重病の竹内の世話と、アナキズム系の刊行物をほとんど独力でつづけ、その彼らを助ける有志も出て、小さいながら、特長のある活動の拠点をつくり出したのである。彼の底しれぬヒューマンなその精力を、溪文社と竹内てるよとの共同生活に費し、竹内の数冊の詩文集、萩原、草野、三野混沌、坂本遼等の詩集の他『アナキズム文獻年報』『サンジカリズム論』『近代学校』等を刊行した努力は忘れ難いが、その中に在ってついに自分の詩集もなく過ぎてしまった。この詩集の編集に当たっている時、このような神谷暢の存在が思いを過ぎり、更にそれぞれ惜別の思いを残す詩人たちがいる。例えば斎藤や矢野、青である。大正期から彼らはアナキズム運動にかかわり、詩集も残している。ある時期どこかで、ともに論じ、対立も協力もして同志意識にまで至り、また押井や戦争など情勢の重

化の中で、見失わなかったような人々である。『弾道』との「農本主義論争」で対立した『北緯五十度』の詩人たち、その一人の猪狩満直は農民詩人としてこの詩集に参加して貰ったが、その他の人々がいる。数多かった『銅鑼』の人として杉山市五郎、柴山群平または森竹夫、横地正次郎、小森盛などもいる。萩原恭次郎の周辺に活動した小林定治、大島友次郎その他、あるいは『冬の土』の人々、『農民小学校』の人々、さらには和沢哲、浅野紀美夫、有島盛三、ある運動の波が退くと、跡には上げ潮のときとは似もつかない醜態も残すけれど、昭和の一時期的なこととして、記憶に手繰り出し得る人々は、私ひとりの記憶を大きくはみ出して、すでに行方も知れぬというものである。しかし、その人々の協力なしには、この『アナキスト詩集』に作品を並べた詩人たちの、仕事というべきものも亦有り得なかったであろう。

4

この詩集にえらんだ戦前の詩人たち、及び収録されなかった人々、そのいわゆるアナキスト系詩人たちと、当時の詩同人誌とのかかわりを特に述べることは止めよう。その数は雑誌も詩人も多数だったという印象のみで、実質はそれほど固まっていたとはいなかった。反抗心に先立たれながらもなお詩壇的であることを如何ともし難かった。やはり昭和に入ってからアナキズム運動の衰弱の外に出るまでには至らなかった。マルキシズムとの共同戦線が失われて一九二六年に出版した文学集団「文芸解放」社以後、アナキズム文学という立場が強調されて、アナキズムのため、その運動のため、の文学ということが、対抗意識も手つだつて一般的に肯定され、当然のようにアナキストの文学という考え方はどこかに押しやられてしまった。大正の前半にそうであった個人主体の文学が、いつの間にか、「アナキズム」という党派文学の趣きを呈してきた。それによって短い期間氣勢を示したが、そこに

は必然的な陥穽があった。それではマルキシズム↓文学、アナキズム↓文学という関係、革命思想と文学の問題において全く相似形となり、アナキストの(文学の)自由、が死んでしまう。「政治」にたいする姿勢にちがいはあっても、それぞれのイデオロギーに沿わんとする文学、イデオロギーに先導され、指導される文学、というこの関係は一つであり、そこに疑惑を持たなかったということ、今からでも振りかえりみる必要はある。独立自主をモットーとするアナキスト詩人にも、そこに思い及んだ者はほとんどいなかったようである。反政治、反権力というイデオロギーに従属することがその、自主独立の喪失であることを気づかなかつた事実、どこかで非アナキズム的でないとはいえない。所謂アナキズム運動の方から協力的同調者の存在として文学を見ることの不可ではなく、その運動に文学が協力するということの意味は、文学として人間の問題に現実的に取組むということではなければならない。にもかかわらず、戦前の詩人たちは、イデオロギーの宣伝と注入、啓蒙を以って詩人の仕事と多分に感じがいしたところがあった。文学がとらえ得る新しい現実性よりも、反政治的反権力的理論への同調と協力をうたうことをもってアナキズム文学とすることには疑問がなければならぬのである。それは文学の否定乃至は何者かへの隷属につながるかに見える。そして大衆よりも個が軽んじられ、アンチ・プチブル意識のみをアナキストの詩に必須の条件と考えたり、労働者農民にあらざれば資格なき者の如くにイジーな発想を振り廻したりする。相互扶助論とヒューマニズムでさえあればアナキズムと心得て外に向ってたたかう意欲を忘れ、仲間内で撫でさすり合うようなアナキスト詩人も輩出した。かくて戦前アナキストといわれた詩人群の幅のひろきは人道上から農本主義までを包括した。そのことが強味であったと同時に、事実に於て明きでもあつたことの解説としては、『弾道』の二つの論争をかえり見れば足りるであろう。

アナキズムについての取組みよりも、アンチ・ボルシェヴィキでさえあればアナキズム

系であるかのような言動の陰には奇妙な夾雑物もあった。当時のボルシェヴィキの活動は文学運動までを含めて大弾圧下にあり、また時代の良心、というものは反抗の行動を若者たちに要求してもいた。そこでわがささやかな良心の慰めに、人道主義や個人主義や農本主義や、及びそれらにかかわる啓蒙主義が、自由のためにきびしく組織を拒否した「アナキズム」の中に漫延する、といった傾向もなかったとはいえない。そのような立場からは、事大主義な被害者意識と手短かな啓蒙主義が発生する。一九三〇年の『弾道』（小野十三郎、秋山清）と『北緯五十度』（更科源蔵、猪狩満直他）との論争（拙著『あるアナキズムの系譜』を参照されたい）はこの前者にかかわり、さらに『弾道』誌上における草野心平と植村謙との論争（啓蒙主義と詩技術についての論争）はこの後者にかかわる。この論者たちそれぞれ短所がないといえず、さりとて真摯でなかったのではない。ただアナキズムの捉え方についての過不足、それに伴う理想主義と現実主義のはきちがい、くいちがいのその故に、前者では農本主義的短所が自覚されず、また後者ではアナキズム的啓蒙として詩を書く、そのための草野心平の技術論に、アナキズムとは何か、アナキストは如何に生くべきかという大上段の構えの植村では、論争は当然のように行き違った。それぞれ抱って立つ所を解明し、論述の現実的文学的意味を解明することが容易ではなかった。わずかに小野十三郎が半年後の『弾道』第七号で「芸術に関する断片」を書いたとき、啓蒙としての表現技術の問題にある目度を得たのであった。さらに『北緯五十度』の良心的な農本主義についてもその反都會的な芸術論のあいまいさがようやくはつきりしてきたといえる。

ここに、アナキスト詩人が抱って立つ各誌各グループの間の対立と模索を一例を以て示すのは、このように司令なく統一なき自由な論争のなから、主体的なアナキスト詩人の生涯と成長が期待される時期を迎えようとしていた、と証言するためである。しかしし

り早く情勢は変化しつつあった。戦争へ傾斜する国内事情とともに、アナキズム系と自他ともに認めた中から、民族主義の横風にあふられたことで、気づかれなかったその人道主義の根の浅さが曝露したからである。インタナショナルな性格を自ら失ったとき、所謂アナキズムが、詩人自らの善意なる一途な犠牲的亢奮のままに、民族主義的愛国者に変貌することは手もないことであった。これは昭和戦前のアナキスト詩人全体の問題である。そのようなひそかなマイナスを内包しながらの、なおこの『アナキスト詩集』ということである、と強調しておかねばならない。

もっぱら主情的で自分らの仕事に客観的鳥瞰を持ち得なかったことの弱点も亦われわれに付随したものである。社会的情勢がファシズムへの傾きを急調する中で、われわれがただ一つ為し得た仕事は、その情勢下で、如何なる詩を書き得るか、書かねばならないか、というひそかな努力であった。社会主義、共産主義、無政府主義という左傾思想は、国体を侵すものとして、言論の自由を与えられなかった。不自由なる表現によって如何なるものを如何に表現するか、この一九三五年に於てこそ、五年前に『弾道』で論争された表現技術と表現対象の問題は真剣でなければならなかったのである。

戦前最後の詩誌『詩行動』はこの年に出て、作品は質量ともに低調ながら、その悪条件、民族主義と愛国主義が国中を圧する状況の中で、後退策戦のような詩の表現論に、最後の努力を費したのである。

われわれの詩は何を目ざして発想するものであるか。それは言わずもがな、それを如何に表現するかに問題は集中する。時代とともにテーマも後退する。いささかの反抗でも不同調でも、生活の場からの現実否定あるいは肯定、わが内なる反権力の意思の立場から現実を見ること、捉えること、これは為し得るものである。それをどういう姿で表現するか。読者にそれを解らせるか。読者なく、また読者の理解と協調を喚起し得ずとも、それ

によって自己が支えられるという、最後の問題が残されている、というもつとも後退的な姿勢に在ったものとしての詩の方法。

これをいいかえれば、語らぬ現実を以て語らせる、ということである。何を以て何を語らせようとするのか。そこに詩人の存在がある。まさに口はふさがれている。反抗もアジテーションもそれらの叫びが最早許されぬとすれば、非人間な圧迫を増加しつつある「現実」であることを、その現実自体を以て、詩人が語るのではなく、現実自体をして叫ばしめよ、語らせよ、という、もつとも後退したところに、なお「場」と「方法」を見出そうとした時期があったのである。一九三五年の『詩行動』という戦前最後の雑誌は、瘦せてしまっていたけれど、『赤と黒』以後の意識的にアナキズムを主唱する詩人集団の変遷の果ての、行きついたところであった。先人の詩の方法を否定して立上った『赤と黒』の方法は、詩的なものの非現実な甘えと感傷を否定したが、自らの方法は発見し得ず、それらの反抗をひっくり返してアナキズムに集結し、昭和の一新時代を、試行錯誤の中にすこしずつ来た果てに、

「意欲が現実をリードする、という詩の到達点の間にリアリズム詩の広大な研究の対象が在る——」

「詩人の現実実践とは、詩人が現実認識を体験にまで高めてゆく態度である。詩人はペンと紙だけで書くのではないということは、彼が生活している社会的現実の中で諸々の事相、それらの関連にたいして積極的な追及の精神を向け、現実の日常性に於て、その歴史性を体現してゆくべきだという意味——」

「いわゆる観念詩としての在来の『闘争的』な主観的な傾向にたいするアンチテーゼとして、客観的傾向への再認識、それからの再出発——。かつての詩への反証としてのリアリズム詩が、要求されるのである。」(『詩行動』における丹沢明の意見)

というところまで後退していた。リアリズムとはこうした程度の、歯ぎしりのようなものであった。しかし、戦争を日本人の行くべき道と唱えはじめた詩人たちに比べて、かかるリアリズムには却ってロマン主義がある。あるいは心底に反抗をひそめている。現われとしても不調であり得た。この詩の方法をもつとも血肉化した者は『赤と黒』以来の小野十三郎であった。別の角度からいえば、歌わないということであった。

うたわない詩、ということとはそれ自体矛盾でないとはいえない。しかしもつとも激烈な精神が、国家や支配に同調しない精神であった一九三五年以降に在って、うたわないことは、自主独立と反権力のアナキストのものでなければならなかった。その前後から戦中にかけて書かれた小野の風景詩は、詩に対するものと、権力にたいするものとの、反抗に支えられたことにおいて、未熟な『赤と黒』の発言の、当然の到着であったのである。

このとき、各自の責任と実力に於て、現実をどのように捉えたか、そのことをここに収録した戦前の詩人たちの作品は、おぼろげにも示しているはずである。

5

この詩集に加わった戦後の三人についてすこしばかり。

戦後には、アナキストの詩人集団というものはなかった。ただ共同戦線的な集団でアナキストが中心に在って働いたといえる三つの詩誌がある。『コスモス』と『イオム』と『処女地帯』である。『コスモス』は一九四六年四月に秋山清、岡本潤、小野十三郎、金子光晴によって創刊された戦後もっとも早い詩誌の一つであり、当然もつともアナキズム色が強かろうはずだが、かつてのアナ・ボル対立の姿勢よりも、共同戦線の色彩に終始し、ここから特別に新しい戦後のアナキスト詩人は出発していない。

それよりも一九四七年に出版したガリ版の『イオム』はアナキズムの色彩が強かった。

戦前のようにイデオロギーを立ててのスタイルではなかったが、現実を、主観を表立たせずに見ること、それを写すことから始めた姿勢には、戦後の方向の定まらぬ社会に対する観点を定めようとするものがあり、そこには公式も指導も拒否して、主体を自我に据える健康さがあった。戦後のどんでん返した現実から出発したということ、はからずも戦前最後のアナキストの詩人集団が、情勢に対処するために行きついたところと、発生の動機はともかくとして、状況に対する姿勢として近似するものがあった。戦後の詩人たちはそこからアナキズムという自主の精神に到達したかの如くである。このグループには詩作力のみでなく、その後のわが国のアナキズム運動に積極的な詩人を輩出、その中から向井孝と高島洋をえらんだのである。

押切順三は、『イオム』とは異った歩みで、重い心理的参加によって現実をとらえるという方法を身につけている。北本哲三と第二次の『処女地帯』を一九五〇年に秋田にはじめ、農村詩人の参加を得て、現在に至っている。

戦後のこの三人に於ける共通性は、それぞれに戦争下に兵役の経験があり、あるいは戦地の経験があり、戦前の詩運動の影響をほとんど受けずして、戦前にわれわれが到達した詩論と近い所に事のはじめから立っているということである。彼らは叫ぶこと、歌うことをその詩にはじめから持っていなかった。(一九七四・九)

秋山 清

アナキスト詩集

一九七四年一〇月二〇日 第一刷

定価——一八〇〇円 ©1974

編者——秋山 清

発行者——相沢尚夫

発行所——株式会社 海燕書房

東京都千代田区内神田一—四—六 三洋ビル

電話(〇三)二九三—九九三一 振替東京一—八三二九

印刷所——丸橋印刷株式会社 製本所——土開製本株式会社

乱丁・落丁本はお取りかえいたします